

| | |
|------------------|---|
| Title | 韓景職とその時代：「正義」と「平和」を中心として |
| Author(s) | 高, 萬松 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, No. 47 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2190 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

韓景職とその時代

——「正義」と「平和」を中心として——

高 萬 松

はじめに

韓景職（一九〇二—二〇〇〇年）牧師の生涯は、二〇世紀の韓国における百年の歴史の断面を見るようである。何よりも、朝鮮半島史の変わり目である一九四五年八月一五日の「解放」の生き証人でもある。この日は、日本では終戦記念日であるが、韓国では光復節とも呼ばれている。この日は、韓国人にとって重要な日であり、韓国人キリスト者にとっては神に感謝を捧げる日である。韓景職は喜びを持ってその日を実体験した韓国人キリスト者の一人である。

しかし、韓景職の喜びは、決して長くは続かなかつた。一九五〇年に同民族同士の戦争である朝鮮戦争が勃発した。約二千万人の離散家族も生じた。この現実によつて韓景職は共産主義者を敵対者と考え始めた。にもかかわらず、彼は北の一般住民には愛と同情を絶やさなかつた。彼は、キリストの十字架の愛を忘れなかつたからである。彼の前半生は日本帝国主義との戦いであつたとすれば、後半生は共産主義との戦いであつたといえる。その基盤の上に、彼は牧会し

たと思われる。キリスト者としての彼の人生は、キリスト教のノーベル・宗教賞と呼ばれているテンプルトン賞 (The Templeton Prize) を一九九二年に受賞したことで輝いている^①。

永楽教会に設置されている十字架の上下には次のような言葉が刻まれている。それらは韓景職の信仰の表れでもある。すなわち、上には「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三章一六節)。また下には「わたしに賜わったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか」(詩篇一一六篇一二節)という御言葉である。前者は韓景職が生まれて最初に覚えた言葉と言っているように、彼における神の恵みの原点と受け止められる。後者は神から受けた多くの恵みに対する彼の応答の表現ではないかと思われる。その両者は、彼の用語では「敬天愛人」^②という言葉に集約できると思われる。これは「神を仰ぎ、人を愛する」という意味と解釈できよう。重要なことは、その言葉の中に含まれている「正義」と「平和」という理念である。韓景職にとつて、神は正義の神であり、神の正義は十字架の上に現れている。それはキリスト教信仰の中心であろう。隣人を愛するということは、神との関係回復によつて、神との「平和」を保つた人間の倫理を意味する。教会はその平和を実践する場である。それが福音伝道の形で現れる。

韓景職は神学者ではなく、神学に関する著述もない。しかし、二〇〇九年に全一七巻から成る韓景職の説教集が韓景職牧師記念事業会から初めて出版された。本稿では、主にそれらの資料を用いて、神学からの視点ではなく、彼の行跡と彼の思想に注目して、韓国キリスト教史の一面を明らかにしたい^③。なぜなら、韓景職の行跡や思想は、韓国キリスト教会の歩みに大きな影響を与えてきたからである。

1 時代の背景

① 韓景職の生涯

本節では、日本の関係を中心に韓景職の前半生を論じたい。一九〇二年二月二十九日に、韓景職は、朝鮮半島西北部にある平安南道の平原郡間里という小さな町で生まれた。ここは平壤から約四〇キロ離れた場所にある。その時代には、アメリカ北長老教会宣教師であるモフエツト (Samuel A. Moffett) が平壤を宣教の拠点として活躍していた。モフエツトは一九〇一年に神学教育のために平壤神学校を設立した。⁽⁴⁾ その以前、韓景職の生まれる五年前に、モフエツトは間里に教会を建てた。当時としては早期に教会が建てられた場所であり、韓景職の親戚はその教会の信徒であった。後に、彼はその恵まれた環境に生まれたことを感謝しつつ、モフエツトにも深く感謝した。⁽⁵⁾

一九一〇年八月二十九日に日韓併合条約が公布された。日韓条約の公布日について、韓景職は「一九一〇年に旧韓国が日本に侵略を受けた後に我が民族の悲しみは言葉で表現できません。私は子供の時にどういう理由であったかは知りませんが、大人達の泣いた姿を見た記憶が残っています」と残している。⁽⁶⁾ 韓国ではその日を「国恥日」と呼んでいた。その日は小さな町の人々にも恥の日であり、悲しみを与えた日であろう。

韓景職は、朝鮮総督府警察から拷問を受けたことがある。一九一九年三月に「三・一独立運動」以後、朝鮮半島では抗日事件が度々起きた。韓崇弘の研究によると、一九一九年二月頃に平壤警察署に爆弾が投げられた。この事件が起きると、日本の警察と憲兵は教会関連施設を捜査の最初の対象とした。教会の牧師や長老、キリスト教学校の教師達を

容疑者と断定し、逮捕して、拷問することが常であった。当時、英成学校というキリスト教学校に勤めていた韓景職も逮捕され、拷問を受けたのである。⁽⁷⁾元永楽教会の広報部長であった金聖寶によれば、韓景職は日本語を知っていたが、教会では日本語を使わなかったと言う。⁽⁸⁾韓景職は、日本語を堪能に扱えるほどの日本教育を受けるような、日本との関わりはなかったと推察できよう。

韓景職は、一九二四年に、神からの召命を受けたという。民族のためにはどのように奉仕すれば良いか悩み、祈っていると、彼は福音を伝えて民族を再生させよという召しを受けた。彼はそれ以降、自分の生が変わったと証しする。⁽⁹⁾

一九二六年にはプリンス頓神学大学に入学し、一九二九年に卒業した。しかし、肺病にかかってニュー・メキシコなどで三年（一九二九—一九三二年）にわたって療養した。韓景職は、その期間中に人生の目的が変わったという。「いつか死ぬかも知れない」から、「ただ聖書を読み、聖書の言葉の通り生活し、命を延ばしてくれば主のために仕事をする」という目的である。⁽¹⁰⁾彼は余命が二、三年間ほど残っていると思い、残っている人生を祖国のために生きるという覚悟で帰国した。その頃、崇仁商業学校というキリスト教学校が開校されるにつれ、そこで彼は一年間教えたが、排日思想が強いという理由で当局から教師資格が取り消された。⁽¹¹⁾

彼は、ソウルから約四百キロ離れた新義州の第二教会で一九三二年から一九四二年まで牧会をしていたが、神社参拝を拒否した理由でその教会を辞めさせられた。⁽¹²⁾その後、一九四三年から一九四五年まで牧会はずに、孤児院で仕事をしていた。そして、一九四五年八月一日の「解放」のニュースを聞いたのである。これについては後述する。

「解放」直後、平安北道の道知事が韓景職に次のように頼んだ。「日本が減んでしまつて今度は米国が入るであろう。その間に空白期間がある。あなたが承知のように、我が日本人と韓国人とは国民感情が最もよくないではないか。これを超えねばならないが、私が他の人に聞いたらあなたが「この問題の解決に適任者と聞いたので」、この責任を受けたらいいと思う」⁽¹³⁾。この要請に応じて、新義州の自治団体の治安責任者として活躍した。その後、韓景職は、一九四五年

一〇月二四日に創設された朝鮮共産党北部分局に対抗するために、私的結社として、青年達を集めてキリスト教社会民主党を組織した。一月二三日に発生した新義州暴動によって命の危険を感じた韓景職は南へ逃げた⁽¹⁴⁾。南に到着した韓景職は一九四五年二月にソウルで教会を開拓した。それが現在の永楽教会であった。

②「神を仰ぎ、人を愛する」

肺病の治療のための結核療養院での三年間は韓景職にとって神信仰の修練の期間であり、「イエスの愛と隣人の愛」を経験する時間であった⁽¹⁵⁾。その時までの韓景職は、他の人と同様に、学位を取って出世することを人生の目標としていたが、その後には彼の祈りは以前と変わった。それは、神が病気を癒してくださいるならば「生きるにも死ぬにも命を主のために捧げる」という祈りであったという⁽¹⁶⁾。神への祈りでは、献身を根本に置くようになったのである。

さらに、彼は、アメリカの病院で隣人愛が何たるかを知った。つまり、何もなかった植民地の青年に代価なしの愛を示してくれたアメリカのキリスト者の姿によつて、隣人愛の体験をしたのである⁽¹⁷⁾。

韓景職の思惟構造における「神を仰ぎ、人を愛する」という理念は愛国心に転化する。ここでいう愛国心は、自然人の持つそれとは違つて、キリスト教信仰に順応したものである。聖書の戒めは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マタイ二二章三七節、三九節)である。戒めにおける愛は、キリストの十字架に示されている。キリストは人類を愛し、人類の罪を贖うために十字架で犠牲になった。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネ一二章二四節)。韓景職は、聖書の戒めに示されているように、愛の実践は身近なところにあると考えていた。

彼にとって、愛の実践は実存的かつ現実的なことであつた。「解放」の直後、彼を含めた大勢の人々が北の共産主義者の圧迫から逃れて南に來た。彼らは、父母・親戚と離れて來たのである。南の都市では、避難民ということで差別されたようである。前述のように韓景職の言う愛国心は、避難民に対する愛の表現であつた。つまり、キリスト教信仰に基づいた愛と犠牲の精神を隣人に適用しようとしたのである。彼にとって、「キリスト教信仰は愛国心の源泉」⁽¹⁸⁾であつたのである。韓景職は「我が民族を愛し、我が国を愛します。信仰に基づいた愛と犠牲の精神は自然に国を愛し、民族を愛する精神に変わります」といふ⁽¹⁹⁾。

2 韓景職の国家観

①「最初の八・一五」の意味

韓景職が一九五五年八月一日に行つた「最初の八・一五の意味」と題した説教は、そのタイトルから興味深い。それは、一九四五年八月一日に日本の植民地支配から韓国人が迎えた「解放」を意味する。韓国史において民族最上の日は、この日である。

「最初の八・一五」には感謝と感激だけでなく、皆の心も純粹であつた。韓景職は、新義州地域の治安維持の委員であつたので、彼の見方は信憑性があるであろう。彼によれば、その頃は泥棒さえなかつた。また、教会の信徒の中には喜んだあまりに、自分の財産を出して教会を建築しようとした人もあつた。その頃の様子は感激と感謝の中の平穩と言つてよいであろう。

韓景職の経験した一九四五年八月一日の様子は次のとおりである。彼は「解放」の最初のニュースを聞いた。「当時「ソ連との」戦争は切迫な状況下に置かれて、南新義州は日本軍が守備していました。一二時過ぎてニュースを聞こうとラジオをつけますと、日本がポツダム宣言を受諾したという放送が流れ、その後日本国歌が流れました。短い間に最後の言葉だけ聞いたので、もしかして私の聞き間違いではないかと思ひ、心の中に始めから聞いたらよかつたと思ひました。その時に孤児院で勤務し、始めからその放送を聞いた先生達と会いました。それを聴き、とても喜んでいた金先生が涙ながらその喜ばしいニュースを私に伝えてくれました。とても感激して私の部屋に集まった人々は涙と共に神に祈りました。……その後、新義州市内に行きましたら、皆が興奮して涙と共に感激と感謝をもつて握手しながら交わりました」⁽²⁰⁾。以上が当時の新義州の様子である。信徒は「八・一五の解放」を神の恵みと信じたであろう。それと同時に、彼らは神の恵みにどのように応えるか祈つたであろう。韓景職もその例外ではなかつたのである。それゆえ、韓景職は最初の八・一五を「真の心、感激の心、報いの心、そして愛国の心」を持つて記念すべきだと言っている。⁽²¹⁾

② 清教徒信仰と正義

大韓民国「韓国」の政府は一九四八年に樹立された。つまり、「解放」後の約三年間は過渡期、もしくは、混乱期であつた。その時期の韓景職の説教は、力強く、国民を教化し、新しい国づくりに関心を払つていた。特に重要なことは、彼が建国の精神として清教徒の信仰である「福音的信仰」を挙げ、そのような信仰を継承しようとした点である。それだけではなく、彼は聖書の神を正義の神とし、政治において「正義」の理念を確立しようとしたのである。「正義」という理念に無感覚であつた当時の民衆にとつて韓景職の主張は、新鮮な刺激を与えたであろう。

第一に、韓景職の持つ信仰の強さの根源には清教徒の信仰がある。北から南に逃れて一九四五年一二月に、韓景職は

ソウルで教会を開拓した。韓景職は一九四七年四月二〇日に「清教徒の信仰」という題で説教した。それは、「今、大韓〔韓国〕も混乱した過渡期です。信徒の皆様は北から南に旅人の生活を送っています。北で長い間住んでいた故郷と家と親戚を離れて、願わなかつた旅をして来ました。南に來た信徒達は旅人の生活をしています。いろいろの艱難と苦痛があります⁽²²⁾」というように、困難な状況にある教会員に対する説教であつた。彼らに向けて韓景職は、その先週に「巡礼者の生活」という題の説教をし、一六二〇年に一〇二人の清教徒がメイフラワー号に乗つてプリマスに到着し、巡礼者の生活をしたことについて語つた。北から逃れた避難民たちは勇気づけられたであろう。そして今度は彼らに清教徒の信仰を教えた。近年では、清教徒関連の研究もある程度進んでいるが、「解放」直後の状況の下ではそうではなかつた。清教徒信仰に目を向けたのは韓景職が最初ではないかと思われる。韓景職は、清教徒の信仰の特質を次のように述べた。まず、彼らは信仰の基礎を聖書から探したことである。清教徒は、生活と道徳の基準を聖書から探し、教会と国家の政治の基準もそこから探つた。また、彼らの神学思想は単純であつて、カルヴァンや使徒であるパウロを通して伝えられたカルヴァン主義であつたことである。つまり、人間は罪によつて墮落したため自分の力では救われない。ただ神の恵みによつて救われるということである。それは神中心的思想であつた。さらに、彼らの道徳生活は嚴格で、彼らにとつて神の御心は彼らの至上命令であつたということである。つまり、世界と妥協せず、健全で清い生活を重視する。それが彼らの「倫理思想の根本原理」であつた⁽²³⁾ということを挙げている。彼は、今、聞いても誤りない健全な清教徒の信仰をプリンストン大学から習つたと考えられる。

第二に、韓景職の思想の強みは「正義」の感覚が生きているということである。「正義は国を高くし、罪は民をはずかしめる」(箴言一四章三四節)。韓景職はその御言葉を国家に対するキリスト者の態度と理解している⁽²⁴⁾。その御言葉は、キリスト者による国家に対する態度、権勢に対する態度、そして政治に対する態度を示している。韓景職は一九四六年の説教にその御言葉を用いているが、政治的過渡期に上記の聖書箇所を引いたのは、韓景職の見識の深さを

示しているといえよう。三〇余年間、朝鮮総督府統治下では一般の国民が政治に参与することはできなかった。「解放」とはそのような時代からの解放であった。もはや「人々は国の主人公のように、政治に関与し国家の繁栄を期待するようになり変りました」⁽²⁶⁾と韓景職は言った。一九四六年頃、朝鮮南部に住んでいた人々、つまり地上の民はそのように考えていたであろう。しかし、キリスト者はそれと同時に神の国の民である。彼らはアメリカ独立宣言の言うように、主権の根本に神があると認める。そこで、韓景職は、主権の根本に神を置かずに滅んだ例として、日本帝国主義を挙げる。韓景職は、「神が政治を実行する人々に剣、つまり権勢を与えたのは、悪しき人を罰するためのものです。しかしこの剣を善い人々の迫害のために使い、預言者を殺したりし、朱基徹牧師のような人を獄死させますと、これは法に従う正義ではありません」⁽²⁶⁾と語った。民族の思想がキリスト教思想に順化される時に正義の国になるという思想を韓景職は持っていたといえよう。

③ 韓景職の愛国心

韓景職にとつて愛国心は民族を愛する心と共に彼の思想の中心軸であると思われる。戦前、プリンストン大学を卒業した韓景職は、帰国後教鞭をとった。しかし、排日思想が強いという理由で日本学務当局から教師資格が取り消された。日本帝国主義の末期には神社参拝の拒否の理由で、牧師職を余儀なく辞任したこともある。戦前、韓景職の日本観は、過激な反日運動のようなものではなく、むしろ「愛国心」に基づいた穏健な抵抗と考えられる。

韓景職における愛国思想は、小さな時から彼の内面に注入されたと見られる。また植民地時代における彼の経験が一生を貫いていた点も看過できない。彼は小学校から大学まで、当時の状況では珍しくキリスト教学校で信仰教育と愛国教育を受けた。さらに、彼は当時の最高の愛国者グループに属する先生達の弟子となつて、彼らから深い影響と感化を

受けた。その代表的な例が民族主義者であった李承薫（一八六四—一九三〇年）からの影響である。一九一〇年頃、日本帝国主義はキリスト者の愛国心を恐れて「百五人事件」を捏造した。李承薫はその事件によって逮捕され日本の警察から酷い拷問を受けた。また、一九一九年三月一日の独立運動の時に独立宣言文に署名し、独立運動に加わったという理由で収監されたこともある。韓景職の国家記念日の説教では殆ど必ず李承薫が取り上げられているほど、韓景職にとって李承薫は重要な存在である。²⁷⁾

李承薫は本来孤児であったが、企業家として成功した。彼が住んでいた地方が韓国の西北地方であり、この地方では当時キリスト教が盛んで、また、商工業も発達していた。国運が徐々に衰弱しつつあった時期に、李承薫は国のことで悩んでいたが、その頃民族指導者であった安昌鎬の演説を聞いて民族のために献身しようと決心した。教育と産業の振興を強調した安の演説のとおり、李は、教育を通じた人材の養成と産業の振興のために全財産を処分し、五山中学校という学校を建てた。しかし、数年後には日韓交渉条約（乙巳條約）によって、大韓帝国の外交機能は日本に移管させられた。失意の底にいた時に、李は友の導きによって平壤の教会に出席し、丁度その時にソウルから来た韓錫晋牧師の説教を聞き、信仰者となった。そこで、キリスト教による希望を見つけたのである。その後、故郷に戻って五山教会を設立し、後にその教会の長老となった。

韓景職は、そのような愛国心の持ち主である李承薫が設立し、曹晩植が校長を務める「五山学校」を卒業した。その学校は、愛国教育、現代の学問と科学教育、そしてキリスト教教育を強調した。²⁸⁾ 当時、その学校では毎日礼拝があった。韓景職の一生で李承薫からの影響はなくならなかった。李承薫は、「誰が何を言っても、私は朝鮮人として生きる」という有名な言葉を残した人である。その李は、学生達を自分の家と呼んで「百五人事件」で警察から鞭で打たれた傷を見せながら、国の独立を励ましたことを韓景職は記憶し、それを現代の人々にも伝えているのである。

④ 韓景職の日本観

韓景職の持った日本観は、時代が過ぎるにつれて漸進的に和らぐ傾向が見られる。一九六五年六月二七日の説教は日韓国交正常化について言及されている。韓景職はその時の日本の姿勢を否定的に見て次のように言う。「今年は乙巳年です。六〇余年前乙巳五条約の辛い記憶を今でも持っています。しかしこの前、日韓条約が新しく締結されました。……日本は過去三六年間我が民族と国家に対して言い切れない罪を犯しましたが、今日に至るまで懺悔しようとする光を見ることが出来ません⁽²⁹⁾」。そして朝鮮戦争時代の日本の態度についても非難している。「六・二五事変の時、自由を守護するために我々は言葉で言えない生命と財産を捧げ、世界の自由の友邦が命と財産をもって助けてくれました。しかし近いところにいる日本は一銭も助けたことがなく、むしろ六・二五を契機にして日本経済が拡大され、復興されましたが、今日国交正常化するこの場に至るまで少しも謝罪する兆しが見えません⁽³⁰⁾」。これは韓景職の率直な心情であったであろう。

ところが、その後、日本に対する否定的な見方が和らぐ。一九八〇年一月の説教で、韓景職は「我が永楽教会だけでなく、韓国教会全体を祝福し、外国にいる同民族の教会も祝福し、さらに日本の教会、アメリカの教会、全世界の教会を祝福し、全世界が福音を受け入れるように⁽³¹⁾」と説教を終えてから祈った。説教そのものもイペテロ三章八一―一二節で、「平和を求めて、これを追え」であり、平和に対する指向が強く見られる。意味深いことは、この説教が公的礼拝の場ではなく、韓景職牧師の家族同士の新年礼拝の時であったということである。公的ではなく、家族内での礼拝でこのように祈るのは、真心によるものと考えられる。このように、一九八〇年代になると、韓景職のメッセージは日本に対する否定的な見方を修正し始めた。

3 韓景職における国家と民族

① 神の賜物としての自由国家

韓景職は、北の共産主義の威嚇が現実的に存在していた冷戦時代に自由民主主義の理念を徹底的に守ろうとした。彼にとつて自由国家は神からの賜物であった。なぜなら、自由国家の理念が聖書からのものであり、自由国家の形成にはキリスト教信仰が欠かせないからである。

韓景職は一九八五年八月、「解放」四〇周年の記念日に「解放の聖書的意味」について語った。「解放によつて三八度線ができました。北では共産傀儡政府が設立されました。彼らによつて六・二五という悲惨な戦争が起りました。数百万人に至る犠牲者は言うまでもなく、未だに離散家族が一千万に至ります。戦争の挑発は未だに残っています」と解放後四〇年になつても変わつていない現実を見ている。⁽³²⁾ その間、南にも様々な不幸があつたにもかかわらず、彼は神に感謝している。⁽³³⁾ それは単なる感謝ではなく、神から与えられた自由に対する感謝であつた。さらに言えば、「靈的自由」と言つてよい。彼の目は北の住民に向かう。「社会的自由はどうでしょうか。信教の自由はどうでしょうか」と注意を喚起し、北には言論・出版・集会の自由、職業選択の自由、旅行の自由、さらに結婚の自由さえないという。そして、「北の住民は何の自由もなく共産党指導者らの下で奴隷生活をしています」と述べ、⁽³⁴⁾ 北の住民に一日も早く「真の社会の自由と国民的自由が得られますように」と祈つたのである。⁽³⁵⁾ しかし、南にも問題がないわけではない。与えられた自由を使う能力が弱く、法を守る精神も欠如している点もないわけではない。そこで、韓景職は、その自由を使う「国民

の道徳的品格」を要求すると力説している。⁽³⁶⁾

② 韓景職にとっての共産主義

韓景職は、共産主義をキリスト教の敵対勢力と考えた。⁽³⁷⁾ 解放の頃、彼は現在の北朝鮮の統治領域にある朝鮮半島西北地方の新義州市に住んでいたが、新義州を去ってソウルに逃げた根本的な理由は共産主義の迫害であった。⁽³⁸⁾ 共産主義者が韓景職の命を狙ったからである。彼の牧会した「ベタニヤ伝道教会」⁽³⁹⁾ では、朝鮮戦争の時、共産主義者によって一人の長老が殉教したこともあった。⁽⁴⁰⁾ 彼は共産主義の残虐さをよく知っていた人であろう。

時局が不安定であつた一九七五年に、ソウル汝矣島広場で国家のための「基督教連合祈祷会」が開かれた。韓景職は開会の辞を通して共産主義の危険性を述べた。その開会の辞の中には二つの強調点が見られる。一つ目は彼らの欺瞞である。まず、欺瞞についてである。韓景職は「彼らは自分たちの国名を朝鮮民主主義人民共和国と呼んでいます、それ自体が欺瞞です。民主主義という言葉が用いられていますが、そこでは一人の独裁主義しかありません。共和国と言っていますが、単なる専制集団しかありません」と彼らの国体を否定した。⁽⁴¹⁾ そして、「彼らの言う解放は奴隷化を意味し、彼らの言う平和は中身が戦争であり、彼らの教育は強制収容所を意味し、彼らの土地分配は土地を全部没収して一人の主人である金日成に捧げることを意味し、彼らの信教の自由は教会の抹殺を意味します」と彼らの宣伝の過ちを指摘した。⁽⁴²⁾

韓景職の開会の辞における二つ目の強調点は、神の正義が勝利するという確信である。神不在の共産主義の思想においては神の正義という理念が入る余地がない。神の存在を否定し、人間の靈魂の存在も否定する唯物論に基づいた思想は長く続かず、悪は自ら破滅すると韓景職は考える。というのは、悪は、自分の中に破壊力を持つているからである。⁽⁴³⁾

当時の状況は、韓景職が「二〇世紀において神は共産主義を自由国家に対する鞭として用いるように見えます。しかし、神はその鞭を使い終わったらそれを折るでしょう。必ず、折る時が来ます」というように緊迫した時代であった。⁽⁴⁴⁾ その中で彼は、神中心的に現実を見つけ、「人間の歴史が神の御手の中にある」ということ、「神の正義は必ず勝利する」という精神を失わなかった。⁽⁴⁵⁾

前記の説教の翌年（一九七六年）、韓景職は「最初の六・二五」「一九五〇年の朝鮮戦争」の意味」という題の説教をした。彼が「最初の」という用語を用いているのは、彼が出来事の根本に立ち向かっているという証拠であろう。戦争が起きて「二六年になりましたが六・二五は未だに我が民族にとつて現実問題です。六・二五の状況はあまり変わっていません。民族の惨劇を起こした共産党は今も南侵の機会を待っています。また南を攪乱させるために多くの方法を用い、浸透作戦を続けています」と語った。⁽⁴⁶⁾ 冷戦時代において、南と北が対置する状況がどれほど厳しかったかが窺える。それと同時に、彼は現実的に存在している北の共産主義からの危険性を常に意識していたと考えられる。

③「民族福音化」

前述のように対立している南と北の状況はどのように打開できるだろうか。それが韓景職にとって生涯の課業であったであろう。その対立の発端は朝鮮戦争であった。それによるキリスト教会関連の被害を見よう。「六・二五動乱「朝鮮戦争」で犠牲となった牧師及び焼失した教会堂の数は、長老教会が約三〇〇〇人（南に四〇〇人、北に二六〇人）、メソジスト教会が約八〇人（南に三〇人、北に五〇人）、ホーリネス教会が約二〇人、救世軍が八人である。そして全焼された教会堂は長老教会が約一、一一三（南に一一三、北に一、〇〇〇）、メソジスト教会が約二〇〇（南に八四、北に一二〇）、ホーリネス教会が約六〇（南に二七、北に三〇）である。また半焼された教会堂は長老教会が四二八、メソ

ジスト教会が一五五、ホーリネス教会が七九、救世軍が四である⁽⁴⁷⁾。上記は物理的な統計に過ぎないが、我々はその戦争における人間の「悪」を見るべきであろう。

その「悪」はキリスト教に対する迫害として現れる。冷戦時代での北朝鮮における迫害の状況はこうである。韓景職は「虐待を受けている人々を考えなさい」（一九七一年）という題の説教で、「この時間は虐待を受けている人々について考えたいと思います。私たちは六・二五をきっかけにして、どれほど多くの信徒達が虐待を受け、また虐殺されたかを記憶しています。しかし、この虐待は今でも三八度線の北部、あるいは鉄のカーテンの裏にある国家では続いている模様です」と彼は地下教会に対する虐待の可能性を示唆した⁽⁴⁸⁾。一九六九年現在、北朝鮮では公認されている教会は一つも存在せず、公的礼拝ができる教会も存在しなかった。

韓景職は当時の北の虐待の一例として、「作業員が約四万名規模の炭鉱で……毎週日曜日になると約千二百名の患者が発生するので……共産主義者がそれを調査し始めた……大部分はある家で幾名かが集まって静かに礼拝をし、ある山里に行つては礼拝をし、ともあれ密かに集まり礼拝する場所を発見し……四五名が処刑された」と紹介した⁽⁴⁹⁾。そのため、韓景職は一九七一年の時点で、北朝鮮には地下教会があると推測していた⁽⁵⁰⁾。問題はどのように伝道するかであった。韓景職は「ですからこの人々が聞き入れようと拒もうとあらゆる方法を用いて福音を伝えましょう。放送を通して、何かの方法で秘密文書を送るかして、基督教文書を通してその人々に真理を教えなければなりません。この「一九七一年という年に、韓国教会が北朝鮮の伝道に対する使命を改めて認識する時が来たと思います」と言う⁽⁵¹⁾。この時期から「民族福音化運動」は、当時の韓国政府の対北対話政策も手伝って、より活発になったと推察できる⁽⁵²⁾。

4 正義の実践としての教会

① 歴史教育の場としての教会

永楽教会の崔元老長老は韓景職牧師の説教の強調点を子孫達への教育にあると見ている。その理由は、「神が我が民族に自由を与えた」からであり、その目的は与えられた自由が子孫達に継承できるためであった。⁽⁵³⁾ 自由を与えた神は正義の神であった。

韓景職の『説教集』において特徴的に見られるように、彼は「三・一独立運動」、「光復節」、「六・二五〔朝鮮戦争〕」などの国家記念日に関連のある説教をした。また、伊藤博文を撃った安重根、韓景職の恩師である李承薫、神社参拝で殉教した朱基徹や孫良源牧師なども説教に度々挙げられている。⁽⁵⁴⁾ その意味で教会は歴史の教育の場であった。前者の二つの記念日は「正義」と深い関連がある。というのは、彼にとって「三・一独立運動」は、「我が民族の独立と国権の回復のための正義の叫び」であったからである。⁽⁵⁵⁾ 一九八四年の「三・一独立運動」の記念説教では、信仰の先達が『この宇宙の中には正義の法則がある。正義は必ず勝利する』このような信仰で独立を宣言しました」と述べられている。⁽⁵⁶⁾ このように韓景職は、正義の神への信仰に立脚して、独立の精神を継承するように教会での教育を重要と考えていた。

②「正義なしに真の平和はなし」

韓景職は戦後の南部においても不義の世界を経験した。一九六〇年には、李承晩による不正と腐敗の政治に反対して、四月一九日に学生による革命が起きた。永樂教会の青年一人も犠牲になった。翌週、韓景職は民族における正義の欠如について謙虚に悔い改め、その抵抗運動によって百人が犠牲になり、数百人の学生が負傷したことに心を痛めている。⁽⁵⁷⁾ また、韓景職は、翌月の説教で「我々信者は不義の政権の下で生活しながら社会の塩と光の役割を担わなかったことを悔い改めなければなりません。不法と不義に対して闘わなかった罪も。闘わなかったことだけではなく、そのような罪を黙認し、さらにそれに参加したすべての罪をも悔い改めなければなりません」と、悔い改めなしに新しい国家は成り立たないと主張した。⁽⁵⁸⁾ 革命による新しい国家とは、正義に基づいた平和の国家と言いかえられる。

韓景職の「神を仰ぎ、人を愛する」という思想は、我々の目を平和の方に向ける。というのは、愛が平和をもたらすからである。そして、世界の歴史をみると、不義の国なのに平和を掲げた例が多くある。この意味で平和は平和だけで存在できないであろう。正義が基盤にならないといけない。韓景職は「正義なしに真の平和はありません。真の平和は真正の正義、あるいは、正義の上で成立します。また、「我々は」真の愛が正義と共にあるということをお忘れはなりません」と語った。⁽⁵⁹⁾ これは神と人間との間の平和が正義の十字架の上で成就されたということの帰結である。

その平和の運動は実践的に「五千万人への伝道運動」に具体化される。伝道は、韓景職にとって愛の実践であり、平和運動の一つである。彼は「まだ主を知らない人々に福音を伝道し、彼らも神との平和が回復されるように力を入れるべきです。この意味で伝道は最大の平和運動だということを忘れてはなりません」と言い、「三八度線にも平和があるように」⁽⁶¹⁾ という祈りで説教を終えた。「公道を水のように、正義をつぎない川のように流れさせよ」（アモス五章二四

節) という言葉のように、韓景職は「正義が実践される所に恒久的平和が維持される」と平和を希求したのである。⁽⁶²⁾

結び

韓景職は神の御手によつて、そして時代の要請によつて国家と民族のために用いられた。しかし、戦前は不義の勢力によつて与えられた賜物を發揮できなかった。教師としても、牧師としても、彼の力は制限されていた。ただし、小さな町の孤児院で奉仕することで彼の力は消えなかつたので、それは決して人生の失敗ではなかつた。神の摂理があつたからである。

韓景職の言うように、彼の人生には二つの記念日があつた。一つは一九四五年の「解放」の日であり、もう一つは一九五〇年「朝鮮戦争」の日であつた。前者は韓景職に実存的問いを、後者は現実的問いを与えたと思われる。前者で彼は国家を心に抱き、後者で彼は常に民族を心に抱かなければならなかつた。両者は彼の涙を要求し、彼はキリスト教信仰をもつて応答した。

韓景職の生涯を一言で要約するならば、「神を仰ぎ、人を愛する」という言葉ではないかと思われる。彼は神に対して、「わたしに賜つたもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか」(詩篇一一六篇一二節)という言葉のように、与えられた恩寵に感謝している。また、国に対しては「正義は国を高くし」(箴言一四章三四節)と願っている。そして彼の念願であつた南と北との平和を常に祈っていた。しかし、そこには、「正義なしには平和がありえない」という前提が付いていた。

テンブルトン賞の歴代受賞者の紹介文に記されているように、韓景職は六万人規模の教会を設立した牧師だけではな

く、北からの避難民と貧しい人々に対して愛を示し、平和を切実に願った平和の使徒と呼ぶことができよう。⁽⁶⁾

注

- (1) Cf. <http://www.templetonprize.org> (2009.12.10). 歴代の受賞者には次のような人々がいる(括弧内は受賞年)。Mother Teresa (1973), Thomas Torrance (1978), Billy Graham (1982), Aleksandr Solzhenitsyn (1983), Kyung-Chik Han (1992).
- (2) 韓景職『韓景職牧師説教全集』第一八巻、ソウル、社団法人韓景職牧師記念事業会、二〇〇九年、三八二頁(以下、『説教集』と略記)。
- (3) 筆者は本稿のために二人にインタビューした。永楽教会の信徒で、韓国の元統一部長官康仁徳氏(二〇〇九年一月三日、聖学院大学総合研究所日韓研究センターに於いて)。永楽教会の元広報部長で、韓国基督教歴史博物館事務局長金聖寶氏(二〇〇九年七月一日、韓国基督教歴史博物館に於いて)。
- (4) 平壤神学校は、現在の長老会神学大学の前身である。長老会神学大学のチャペルの名前は「韓景職記念礼拝堂」となっている。校庭にはモフエットの像が設置されている。
- (5) 『説教集』第一四巻、三五七頁。
- (6) 韓崇弘『韓景職』ブックコリア、二〇〇七年、五八頁。
- (7) 指の間に棒を挟んで、手先を天井に吊るし上げるような拷問であったであろう。
- (8) 金聖寶の証言。
- (9) 李萬烈「韓景職牧師を会う」『韓国基督教と歴史』(創刊号、一九九一年、韓国基督教歴史研究所) 一三八―一九頁。
- (10) 同上書、一四七頁。

- (11) 同上書、一四八頁。
- (12) 同上書、一六一頁。
- (13) 同上書、一五四頁。
- (14) 同上書、一五五頁。
- (15) Eun-Seop Kim 「解題」第一卷、ii—二頁。
- (16) 李、前掲書、一四七頁。
- (17) 『説教集』第一卷、ii—三頁。
- (18) 『説教集』第一四卷、五三二頁。
- (19) 『説教集』第一四卷、五三三頁。
- (20) 『説教集』第二卷、五五頁。
- (21) 『説教集』第二卷、五七頁。
- (22) 『説教集』第一卷、七九頁。
- (23) 『説教集』第一卷、八六頁。
- (24) 『説教集』第一卷、二三頁。
- (25) 同上。
- (26) 『説教集』第一卷、二七頁。
- (27) 韓景職は、韓国教会における一〇〇周年の恩寵という題の説教において、内容の半分以上を李承薫の話に割愛している。
『説教集』第一七卷、一一二頁。
- (28) 『説教集』第一八卷、五二頁。
- (29) 『説教集』第八卷、三六五頁。
- (30) 『説教集』第八卷、三五—三五六頁。
- (31) 『説教集』第一六卷、八〇頁。
- (32) 『説教集』第一七卷、五〇八頁。

- (33) 『説教集』第一八卷、五〇八頁。
- (34) 『説教集』第一七卷、五一頁。
- (35) 『説教集』第一七卷、五一頁。
- (36) 『説教集』第一七卷、一六五―一七四頁。
- (37) 韓崇弘、前掲書、一二二頁。
- (38) 閔庚培『教会と民族』、ソウル、延世大学校出版部、二〇〇七年、四九五頁。
- (39) 永楽教会の前身である。
- (40) 『説教集』第二二卷、五〇三頁。
- (41) 『説教集』第一四卷、四〇七頁。
- (42) 同上。
- (43) 『説教集』第一四卷、四一二頁。
- (44) 同上。
- (45) 同上。
- (46) 『説教集』第一四卷、五三七頁。原文には三六年となっているが、この説教は一九七六年のものであるため、二六六年が正しい。
- (47) 金良善『韓国基督教解放十年史』ソウル、長老会総会宗教教育部、一九五六年、九〇頁。
- (48) 『説教集』第二二卷、二七六頁。
- (49) 『説教集』第二二卷、二八一頁。
- (50) 同上。一九七一年一月一七日の説教。
- (51) 『説教集』第二二卷、二八三頁。
- (52) 平壤を訪問した康仁徳は当時の政治状況について次のように証言している。「私は一九七二年一月に平壤を訪問しました。当時韓景職牧師は『民族福音化』を説教しました。一九七〇年八月一五日の光復節に朴正熙大統領はいわば『平和統一構想(どちらがより国民に幸福を与える体制であろうか、競争して見ようという趣旨)』を発表し、一九七一年八月一五日に

は『離散家族再会事業』のための赤十字会談を支援すると発表しました」。

(53) 『説教集』第一卷、iii—九。

(54) 『説教集』第二二卷、五〇二頁。韓景職は次のように安重根の信仰を評価している。「安重根義士が旅順監獄で日本の官憲によって処刑される時に遺言しました。将来祖国が光復「独立あるいは解放」を迎える時に私の遺骸を故国に持って行って埋めてください。歴史は彼の信仰のようになりました」。『説教集』第一四卷、二七一頁。

(55) 『説教集』第一七卷、四二九頁。

(56) 『説教集』第一七卷、二〇五頁。

(57) 『説教集』第四卷、三四〇—三四六頁。

(58) 『説教集』第四卷、三五五頁。

(59) 『説教集』第一八卷、六八頁。

(60) 『説教集』第一八卷、七〇頁。

(61) 『説教集』第一八卷、七一頁。

(62) 『説教集』第一八卷、七〇頁。

(63) <http://www.templetonprize.org/previouswinner.html#han> (2009.12.10).